


モンシロチョウを育てる 草牟田幼稚園（鹿児島県鹿児島市）

【4歳児】

子どもたちがいろいろな虫や植物の成長の変化に出合った時、「おや?」「なぜだろう」「すごい」「不思議だ」等さまざまな驚きの声を上げる。職員が工夫した園内の環境が子どもたちの心を引きつけ、知的発達を促していくものと考え。さまざまな事象に出会う場面は、一人の場合もあるし複数の場合もある。年少児の子どもたちは一人遊びの場合が多いが、年中児、年長児となるにつれ、複数の場合が多くなっていく。だんご虫に群がったり、おたまじゃくしを観察したり、あるいはオシロイバナの種を採ったりする場合、個人やクラス全体よりも小グループでの活動を好むようである。これまで見逃しがちであったこの小グループの中で子どもたちのつぶやきや声に保育者ももっと耳を傾けて、共感することにより子どもたちの満足感を深めたり、興味・関心を広げたりする手助けになるものと考え。

実践事例

	幼児の活動	幼児のつぶやき	保育者の援助
4月	<ul style="list-style-type: none"> 卵と幼虫の観察をする。 毎朝、飼育ケースを眺める。 飼育ケースを叩いてみたり、ゆすったりしてみる。 	<p>「いっぱい卵があるよ」</p> 	<ul style="list-style-type: none"> どんな場所に卵が産みつけられているのか、一緒に観察し興味を持つことができるようにする。 観察しやすいように、飼育ケースに入れ、興味・関心が持てるよう言葉をかける。
5月	<ul style="list-style-type: none"> 卵から幼虫になったものが増え始め、飼育ケースより出てくると、見つけては喜び、手にとる。 (虫を怖がり触らずに、発見を知らせる子もいる。) 	<p>「うわぁ！ちっちゃい虫もいる」 「触ったらフワフワしてたよ」 「かわいいね」 「緑のウンチがいっぱいあるよ」 「幼虫、何匹いるのかなぁ」 「昨日より、増えてるんじゃない?」</p>	<ul style="list-style-type: none"> 幼虫が増え、ケースより出てしまい気づかずに踏まれることのないよう、環境を整える。 共に観察し、幼児の発言に耳を傾け幼児の気持ちを受け止める。
6月	<ul style="list-style-type: none"> 蝶へと成長すると手で捕まえようとする。 	<p>「寝てるねえ」 「死んでるのかな?」 「だめだよ。優しくしないと、ギョッてしたら、死んじゃう」</p>	<ul style="list-style-type: none"> 少しずつ蝶へと成長する様子を観察して見守り、蝶が過ごしやすい環境を考える。
7月	<ul style="list-style-type: none"> 保育者の援助により、飼育ケースから放たれる蝶を見る。 	<p>「飛ぶかなぁチョウチョさん」 「飛んだ飛んだ!」 「バイバーイ!」 「うわぁ!もう、あんな高いところに行ったよ。すごいね!」</p>	<ul style="list-style-type: none"> 蝶へ成長し手狭になった飼育ケースから、空へ放す。

< 考 察 >

- 幼児と共に動植物に触れ合うことで、幼児が自然に興味を持ち、日々の小さな変化にも気付いたり、観察したりすることが大切である。
- 幼児が直接的に自然を体験し、生命の誕生や成長に気付き、保育者も共感することで、発見する喜びや驚きなどを味わうことが大切である。

みどころ

身近に飼育物を置いて、卵から蝶になるまでの様子や変化に興味をもってかかわれるようにしています。虫への親しみが増すことで、成長を見守り喜ぶという「科学する心」が養われています。4歳児が4月から7月までの長期間にわたり興味を持続するには、環境や保育者のかかわりなど、適時の援助が大切です。